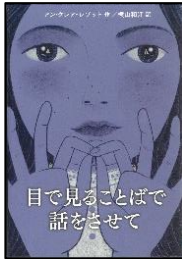


『目で見ることばで話をさせて』 アン・クレア・レゾット／作 岩波書店（Y933メ） 11歳のメアリーは、マーサズ・ヴィンヤード島のチルマークに住んでいる。この町は、ろう者が多く、手話を交えながら話すことが当たり前だった。そんなある日、ろう者が多い原因を探るため、この町に若い科学者が調査にやってくる。その科学者は、耳がきこえないメアリーたちに差別的な発言をする。ろう者であることを初めて差別されたメアリーは戸惑う。 	『あしたの幸福』 いとう みく／著 理論社（YFイ） 中学2年生の雨音^{あまね}は父親と二人暮らし。だが、その父親が事故のため突然亡くなる。親戚からは一緒に暮らすことをすすめられるが、彼女が選んだのは、長い間、音信不通だった生みの母と暮らすことだった。その母との同居がしばらく続いたあと、今度は父親の婚約者が一緒に暮らしたいと言い出だす。雨音の生活はどうなってしまうのか？ 	『#マイネーム』 黒川 裕子／作 さ・え・ら書房（YFク） 明音^{みおん}が入学した中学校では、今年度から名字に“さん”を付けて呼び合う「SUNさん運動」が始まった。両親の離婚で名字が変わった彼女は、この運動に抵抗感を感じる。そんなとき、SNSでのやりとりがきっかけとなり、自分で呼ばれたい名前の名札を付けて登校することが学校で広がる。しかし、それが問題となり…。 	『アレグロ・ラガッツァ』 あさの あつこ／著 朝日新聞出版（YFア） 桜蘭学園高校に入学した由実^{ゆみ}は、中学のころ吹奏楽部でフルートを吹いていた。従姉妹に憧れて始めたのだが、友達から本気で吹奏楽をやっていないと言われ辞めてしまう。高校入学後は、部活のことなど考えていなかった彼女だが、同じクラスの孤池^{こいけ}くんが吹奏楽部へ入るようしつこくすすめられる。気持ちが揺れる由実はどうするのか？ 	
『マスク越しのおはよう』 山本 悦子／著 講談社（YFヤ） 新型コロナが感染拡大をし、緊急事態宣言が出て、学校は臨時休校。登校できるようになってもマスク生活が続き、友達の表情もわからなくて、心もソーシャルディスタンスをとっているようだった。でも、コロナって悪いことだけじゃない?! コロナ渦を過ごすことで、自分を見つめなおしたり、大切なものに気づいた5人の物語。 	『団地のコトリ』 八束 澄子／著 ポプラ社（YFヤ） 中学3年生の美月^{みづき}は、団地で母と二人暮らし。彼女は、下の階に一人で暮らす柴田^{しばた}のおじいちゃんの家になれかがいる気配を感じていた。ある時、彼女はその部屋から助けを呼ぶ声を聞く。中に入ると、そこには小学5年生の陽菜^{ひな}とその母親がいた。二人は清水のおじいちゃんが一時保護のつもりで連れてきた親子で、陽菜は居所不明児童だった。 	『マイブラザー』 草野 たき／著 ポプラ社（YFク） 中学2年の海斗^{かいと}は、中学受験をあきらめた小学6年のころから弟の面倒を見ている。このころ、理想の道を歩んでいた父親が会社をやめてしまい、それが許せなかった海斗は、中学受験もやめてしまったのだ。それからは将来への希望も持たず、ただひたすら弟の面倒を見て過ごす日々を送っていた。そんな時、幼なじみの彩音^{あやね}と偶然再会する。その後、保育園の同窓会をしようと提案される。 	『100時間の夜』 アンナ・ウォルツ／作 フレーベル館（Y949ヒ） オランダに住む14歳のエミリアは、父親が起こした事件のせいで、ツイッターで脅迫を受ける。もうこんなところにはくれないと、彼女はニューヨークへ家出をする。しかし、到着すると、次々にトラブルに見舞われてしまう。そんな中で出会ったのがセスとその妹アビー、そしてジムだった。やがて、大型のハリケーンがニューヨークに上陸し、街中が停電する。電気も携帯電話も使えな中、エミリアはセスたちと過ごすことになる。 	
『タブレット・チルドレン』 村上 しいこ／作 さ・え・ら書房（YFM） 心夏^{ここな}は、学校で渡されたタブレットでAIの子どもを育てるという課題を与えられる。彼女が育てることになったのは、マミという生意気な小学生だった。いきなり「わたしのこと、愛してる？」などと聞いてきて、たじたじになる心夏。しかし、マミから言われる言葉は、自分が家族に接するときの態度と同じではないかと思い、家族との関係を考えるようになっていく。 	『笹森くんのスカート』 神戸 遙真／著 講談社（YFコ） 作草部高校では今年度からジェンダーフリー制服を導入した。女子の中にはスラックスを着る生徒もいるのだが、1年生の笹森くんが選んだのはなんとスカート。ある日突然スカートで登校してきた彼に、まわりは性的マイノリティーでは？ などとうわさをする。はたして真相は？ 	『給食アンサンブル』 如月 かずさ／著 光村図書出版（YFキ） 私立の学校から公立中学校に転校してきた美貴^{みき}。なにかにつけて以前の学校との違いが気になり、新しい学校になじめずにいた。そんなとき、給食の七夕ゼリー^{こすえ}を仲良くなった梢にしてくれないと言われて…。(「七夕ゼリー」より)給食にまつわる短編連作集。2巻もありますので、そちらもどうぞ。 	『小公女』 フランシス・ホジソン・バーネット//作 福音館書店（933バ） セーラは、とても裕福な家庭で育ち、寄宿学校でも特別な待遇を受けていた。しかし、いばるような態度をとることもなく、礼儀正しく、想像力が豊かで、みんなを引きつける力があつた。ある時、父親が亡くなったために、無一文になってしまったセーラ。生活は一変し、学校で働かされることになる。しかし、彼女は誇りを持つことを忘れずに生きていくと決める。 	
『となりの難民 日本が認めない99%の人たちのSOS』 織田 朝日／著 旬報社（Y369ト） 難民とは、戦争や迫害などから逃れるために、他国へ避難してきた人たちのこと。日本は「難民条約」を結んでいるため、難民の人たちがやってきます。では、日本にきた難民の人たちはどんな境遇で、どんな生活をしているのでしょうか。著者が行っている難民の支援についてもこの本で紹介します。 	『巨大おけを絶やすな！ 日本の食文化を未来へつなぐ』 竹内 早希子／著 岩波書店（Y583キ） かつて、しょうゆや味噌^{みそ}を作るために欠かせなかった巨大なおけ。その木おけを作る技術が絶えようとしています。そんな現状を知り、立ち上がったのが小豆島のしょうゆ職人でした。さまざまな困難を乗り越えて木おけ作りを全国にまで広めたプロジェクトを紹介します。 	『食品ロスはなぜ減らないの？』 小林 富雄／著 岩波書店（Y611シ） 日本では、食べものを大量に捨ててしまっている「食品ロス」という問題が起きています。どうしてこういった問題が生じるのでしょうか。この本を読んで、食品ロスの解決に向けて自分たちに何ができるか考えてみませんか。 	『おかあさんのいのり』 武鹿 悦子／さく 江頭 路子／え 岩崎書店（Eエ） 赤ちゃんが生まれたお母さんが祈るのは、子どものすこやかな成長。そして、その手がどうか銃などを手にすることがないこと。平和を願う母の想いが込められた絵本。 	『くつがいく』 和歌山 静子／作 童心社（Eク） 兵隊たちがはく靴は戦場から戦場へと行く。そして、そこで靴たちがしたこと、見たこととは？ 